



## “科学立国の鈍化”

東京学芸大学名誉教授 理学博士

藍 尚 禮

今年（2017）も、ノーベル賞の授賞者発表の時期となった。昨年は東京工業大学名誉教授の大隅良典氏が、“自食作用（オートファージ）”の機序を分子レベルで解明されたと云う業績により授与されたことは、まだ記憶に新しい。光学顕微鏡のもとで酵母を材料に細胞内での物質の動きを観察し、電子顕微鏡下で微細な変化を、忍耐強く、強い創造性をもって調べられたこと、そしてその分子レベルでの物質の動きを解き明かしたことは、ノーベルの思想“人類に有用な科学的知見を見出した科学者に与える”と云う意図に沿うものとして世界の賞讃を浴びた研究と云うことだ。医学生理学賞は殊に人間の命に直接かかわりを持つ業績に与えられている。これは神経の変性にかかわる疾患、加齢に伴う疾病に対する有用な治療にヒントを与えてくれると期待が大きい。孤独な、時に忍耐を求められる仕事に、やがて多くの人達を巻き込んですすめる研究とは、誰にでも出来るものではない。大隅博士の業績のすばらしさは、口では表現できぬ努力の結晶とも云える。さて、その大隅博士が受賞に際し、こんな言葉を口にされた。それは、“今後、ノーベル賞受賞者は、日本人には無くなるのではないか？”と云うのである。つまり、私が最後の授賞者になるのではないだろうか云う心の中での不安と嘆きを、ふと口にされたのではないだろうかと思うのである。

その一言は、実際に我々に伝えられ、現実となったのが今年である。ここ何年か日本人受賞者が続き、世界の絵舞台でその研究の成果が大きく報じられたことは衆知の事実である。

今年も、“概日リズム”を司る仕組みを分子レベルで解き明かした研究にノーベル医学生理学賞が決まった。ジェフリー・ホール（72才）、マイケル・ロスバッシュ（73才）、マイケル・ヤング（68才）の三氏がその人達で、米国の研究者に決まった訳である。見事、大隅氏の言葉が現実となった訳である。今年この分野の研究者や研究が日本人の研究者の間で無かった訳ではない。しかし、日本の研究者の中から選ばれることはなかったのである。昨今の日本の傾向は、直ちに利益、利潤の得られる研究には研究費を手厚く配分しても、地道に基礎の研究をしている人々には“金食い虫的な視線”をなげかけて、申し訳程度の研究費を配分して終わることが殊に目につくのである。好きでやっているのだから、研究費は自分で負担すればよいのではないか。これは、まさに、研究とは何ぞやを全く理解していない。悲しい考え方と云わざるを得ない。経済に力を注ぐこの国の政治は、“金”にもならぬ“文学”、金食い虫の“教育”に見向きもしない昨今である。時間を要し、忍耐強くすすめている科学分野の基礎には見向きもしないのは当たり前と云う感覚なのか。大企

業は、安い賃金で働く人々の上にあぐらをかいて、せっせと財（内部留保）を積んでいる。配分より将来の不安を理由にものすごい財貨の蓄積が報じられている。実におかしな話である。そんな事態には目も向けず、将来に向けて、科学立国を目指す資源のないわが国にとっては、研究者を育て、学問にはげむ若者たちの教育を国家的な大きい投資と考える知恵はないのだろうか。大隅氏の“一言”は、まさにこの国の科学に対する基本的な姿勢に対しての警告、警鐘と受け止めなければならない言葉なのである。氏は、若い人たちを育てる奨学金を現実を考え、行動に移している。一方、大きな企業は、長い時間、利潤追求に走ってきている。昨今、機械、原材料として利用される製品や、それを利用して製品を提供している製造業各種に、承知して行う不正があばかれると云う情けない事件が続出している。責任を取るべき人々が、本当に、このような事態を取り返しのつかぬことと理解しているのだろうか。

教育の力が弱体化したこと、それに加えて金銭至上主義のばっかが、今日のゆがんだ社会を生み出しているのでは、と思うのである。

国際的な視座でわが国を眺めてみると、日本国の立ち位置がすべての面で年々落ちていっていることである。日本は決して先進国ではない。

明治維新で、この国の国おこしを考えた人たちが、真っ先に手をつけたのは、小学校から始まる教育のあり方、義務教育、そのための教育の内容、指導者の育成、言葉の統一、標準化、成長に伴う内容の進化など。すべて欧米の先進国に一步でも近づき、遅れをとりもどすこと、

加えて科学的な知識の注入とその発展など、短い時間で、全力を注ぐ国の力での仕事としたのである。教育こそ国の、人びとの未来に対する大きい、力強い投資と考えた筈である。下って現今の社会では、教育への投資は、目に見える明日の“利益”を期待するのには向いていない。経済こそが国の発展に資する力なのだと云う情けない国造り、国の将来に対する構えに変わってしまったと云うことだ。つまり、効率の悪い、時間のかかる仕事、教育は一休止させても致し方なしと云う悲劇的ともいえる思考の登場が大きく取り上げられている。加えて、老人国家、少子国家と云う目にも明らかな国には、この方式しかないのだと云わんばかりの風潮である。

科学教育の大切さを身にしみて感じている者には、この国の未来はどうなるのだろうかという不安とともにあせりさえ感じるのである。

先見性、創造力、そして忍耐力を求める科学研究の分野には、粘り強い指導と、研究費が伴わねばならぬことも判っている。しかし、昨今の社会の求めは、基礎研究に対する理解と支持とが軽んじられているように思えて致し方ない。また、若者の間にも地味な忍耐を要する生き方に対し、覚悟が無いように思えてならないのである。本当の科学の面白さを知る、学ぶ機会も少ないように思える。

ここで、先に述べた大隅さんの言葉を思い出すのである。私もこれからこの国の“科学”の発展は大きく望むべきものではないのかもしれない。いや、知れないなどと甘い言葉で済ませるものではないと断言すらできると考えている。この国の将来に大きい夢と希望が持てるようになるのはいつの日だろう。ひとえに科学教育をないがしろにする国家的な誤りに起因するのではないだろうか。